

を単独で動注したものを Group 1, $^{99m}\text{TcO}_4^-$ に Lp を混合した後動注したものを Group 2, $^{99m}\text{TcO}_4^-$ と Lp を動注した後 GS 塞栓したものを Group 3 とした. 腫瘍部と非腫瘍部について30分間の time activity curve を作成し, さらに4時間後と24時間後の spot 撮影を行い腫瘍部と非腫瘍部の集積状態を計測した.

$t_{1/2}$ を計算すると Group 1 では腫瘍部の値が非腫瘍部より低かったが, Group 2, Group 3 では腫瘍部のほうが $t_{1/2}$ が延長し特に Group 3 で延長していた.

Group 2 と Group 3 との4時間後と24時間後の spot 像では腫瘍部に高い集積を認め抗癌剤の腫瘍内停滞が示唆された. Group 2 より Group 3 のほうが4時間後で腫瘍部の count が高く, かつ24時間後でも腫瘍部の wash out が遅延していることがわかった.

以上の結果より Lp は抗癌剤を腫瘍内に停滞させる効果をもち, GS による塞栓は抗癌剤をより遅延させる効果をもつことが示唆された. われわれは Lp-TAE は抗癌剤と塞栓効果の両方が期待できる有用な方法であると確信する.

57. 原発性胆汁性肝硬変の骨病変について ——各種パラメータによる検討——

塩見 進	倉井 修	池岡 直子
関 守一	針原 重義	黒木 哲夫
小林 絢三		(大阪市大・三内)
岡村 光英	福田 照男	越智 宏暢
小野山靖人		(同・放)
門奈 丈之		(同・公衆衛生)

原発性胆汁性肝硬変 (PBC) 患者を対象に血清化学検査および骨の各種パラメータを測定し, 骨病変の特徴を検討した.

〔対象・方法〕 PBC 16 例 (男性 1 例, 女性 15 例) を対象とした. 血清化学検査として血清 Ca, P, ALP, $25(\text{OH})\text{D}_3$, $1,25(\text{OH})_2\text{D}_3$, Osteocalcin 値を測定した. 骨病変を調べる方法として, 1) 第 II 中手骨単純レントゲンの MD 法による解析, 2) 橈骨の bone mineral analysis, 3) dual photon bone densitometry による腰椎の骨塩量測定, 4) 頭蓋骨 X 線 CT による EMI 値の測定, 5) 骨シンチグラフィについて検討を加えた.

〔成績〕 1) 血清 $25(\text{OH})\text{D}_3$, $1,25(\text{OH})_2\text{D}_3$ の平均はそれぞれ 12.4 ng/ml, 31.1 pg/ml でやや低値を示した. 2) MD 法では 14 例中 6 例, BMA では 11 例中 4 例, 頭蓋骨 X 線 CT では 7 例中 3 例において異常を認め osteoporosis への進展が疑われた. しかし, 骨シンチグラフィでは特徴的所見を見いだせなかった. 3) 血清 Osteocalcin 値は PBC の骨病変を認める症例でやや高値を示し, PBC の骨病変は代謝回転の早いことに起因する可能性が示唆された. 4) dual photon bone densitometry を行った症例において第 3 腰椎の骨塩量の低下を認め, 本法による評価も可能と考えられた.

〔結語〕 PBC の骨病変はステロイド治療の障害にもなっているが, これら種々の骨のパラメータを測定することにより骨病変の早期診断が可能であり, ステロイド治療の副作用防止にも有用と思われる.